

アマゾンの森を歩く

池谷 和信
いけや かずのぶ
民博 民族社会研究部

薄暗い森

森のなかの道を歩いていると、突然、けもの匂いがした。ハンターは道からはずれて樹木のあいだを急ぎ足で歩きだし、その姿は見えなくなった。数分後に彼はもどってきた。早朝にベッカーリー（イノシシに似た動物）の一種サヒーノが数頭ここを通ったというのだ。近くには、数多くの足跡と直径一センチ余りの丸い糞が十数個あった。どうやら、ベッカーリーはこの場所にしばらく滞在していたと思われる。周囲には、彼らの好物であるナッツ類が数多く落ちていた。

これは、世界でもっとも大きな熱帯雨林が広がるアマゾンの森でのほんのひとつまみである。わたしは、雨季にマメルトという名のハンターの狩猟に同行していた。彼は、朝六時ごろに川岸の高台にある家を出て、ショットガンを左の肩にかつぎ、右手には鉄製のカマをもって森を歩く。森のなかには整備された道が伸びているが、道をささぎる木や草があると、立ち止まりそれらを取り除いていく。森のなかは薄暗く蒸し暑い。あつく積み重なった枯葉



ショットガンを片手にもつハンター

をふみつけて進む。途中、大木が自然に倒れる音がする。ジャングルが生きていると感じる瞬間だ。

マメルトは、上流部で離れて暮らす人の一人だ。彼によると、別のベッカーリーの一種であるファンガナは、五〇から一〇〇頭の群れをつくり森を移動するという。わたしは群れで川を渡るところを目撃したことはないが、その光景は圧巻であろう。ちょうど二週間前に、彼はファンガナを仕留めていた。そのときの皮が、家に置いてあった。隣人のメスチゾの男性から銃弾をもらっていたので、肉の半分



屋根裏の梁(はり)にかけられたベッカーリーのおごの骨

は彼にわたしたという。皮は、小船で四時間近くかかる町で売る予定だという。アマゾン川の港町はどこでも、バナナ、キャッサバ、魚などいろいろなものが集まっていて活気がある。アマゾンの村が、孤立していないことを感じる。ベッカーリーの皮も、仲買人の手によって、村から町、そして都市に運ばれる。しかし、この皮が、ドイツを中心として海外に輸出されているということはあまり知られていない。その総数が、ペルーのアマゾン全体で、年間一三万枚以上に達すると聞いて驚いた。皮は、ゴルフ用の手袋などに加工されて販売される。

町から世界へ

アマゾンは、世界最大の熱帯雨林が広がる地域としてはよく知られているが、わたしは、むしろ世界最大の商業狩猟の場でもあるとらえている。現在、世界のほとんどの国で自然保護が叫ばれ、獲物を捕獲する狩猟という行為が制限され禁止されているところも多い。地元のハンターが、狩猟という日常的な行為をしていて逮捕されることも少なくないのだ。

ペルー東部のアマゾンでは、日本とほぼ同じ面積の土地で年間一三万頭のベッカーリーが狩猟で捕獲されており、長いあいだ毛皮が海外に輸出されてきた。ここでは商業的ではあるが持続的な資源利用がおこなわれてきた可能性がある。

彼が、突然、立ち止まった。緊張が走る。耳をすましている。リスザルがいるという。高さ十数メートル以上のところにナマケモノがいるのを指差してくれたこともあったが、わたしはその姿を確認できなかった。ベッカーリーの足跡だけではない。シカやカピバラのものもある。彼はおよそ五時間ものあいだ一度も休憩することなく歩き続けた。結局、この日は獲物と出会うことはなかった。よい夢を見ると猟の成功につながるという彼の口ぐせからすると、昨晚見た夢がよくなかったかなのだろう。

森から町へ

マメルトは、ペルーアマゾンに暮らすマイフーナ・インディオの若者である。彼らの総人口はわずか数百人で、国内の四つの村で暮らしてきた。もともと彼らは、アマゾン川の支流のさらに支流の上流部に散在して農耕や狩猟をおもななりわいとしていたが、一九六〇年代以降に、全体の三分の一の人は小学校のある下流部に集住するようになった。しかし



港町にある毛皮の店には大量のサヒーノの皮が積み重ねられていた

このことは、動物と人とをわけて動物を保護しようとする思想がますます普及している現在、地球上の動物と人との共存を考える際に注目すべき点だ。現時点では、マメルトがもっていた皮と世界の皮流通とのあいだにどのようなつながりがあるのかはわからない。しかし、わたしは、彼らと森を歩くことを積み重ね、森から世界へつながっていくという地球的な視野をもつことで、地球上の動物と人とのかわり方について考えていきたいと思っている。